

『 “自身の存在を芸術に見出す価値観、 —わたしは人を愛し、感謝をする姿勢に徹している。これは人望と徳を兼ね備えた最も信頼のおける友人から受けた影響によるものだと思っている。その男とは伊豆の下田にアトリエを持ち、今、最も期待される抽象画家のひとり、丹曜(たんよう)命(めい)であり、生まれ持った感性、誠に豊かにして、形態や事象・感情を客観的にキャンバスにぶちまける天賦の才の持ち主である。彼の代表作と言われる『語らいの本質』を直視したときには脳が破裂するほどに、作品の前で驚愕したまま全身の震えが治まらなかった。まさに持って生まれなければ、表現することはできない技量があった。神が絵筆を握るがごとくに一意専心で仕事に向かい、アトリアからは目途が立たなければ一切出てくることはない。彼は人との接触を極度に嫌っている。画壇では異端児的な存在ではあるが、本来は自由奔放のお洒落な性格で、わたしは好感を抱いているのだ。』

上記の文の誤字脱字、表現をあらためたほうがよいものについて、指摘してください。

全体として文章には熱量があり、人物への敬意がよく伝わってきます。一方で、誤字や表現の重複、やや不自然な言い回しがいくつかあります。以下に順を追って指摘します。

1. 明らかな誤字

① 「アトリア」→「アトリエ」

アトリアからは目途が立たなければ

これは誤字です。

修正

アトリエからは、目途が立たなければ

2. 「目途が立たなければ」の意味

神が絵筆を握るがごとくに一意専心で仕事に向かい、アトリエからは目途が立たなければ一切出てくることはない。

「目途が立つ」は計画や見通しに使う言葉です。

絵画制作であれば、

- 納得のいく作品が完成するまで
- 構想がまとまるまで
- 筆が止まるまで

などの方が自然です。

例えば

アトリエからは、納得のいく作品が完成するまで、一切姿を見せることはない。

の方が情景が浮かびます。

3. 「客観的にカンバスにぶちまける」

形態や事象・感情を客観的にカンバスにぶちまける

ここは少し意味がぶつかっています。

「ぶちまける」は衝動的・感情的な印象があります。

一方、「客観的に」は冷静さを意味します。

両者がやや矛盾します。

例えば

- 昇華する
- 投影する
- 定着させる
- 描き出す

などが自然です。

もし「ぶちまける」を生かすなら

内なる形態や感情を、ためらいなくキャンバスにぶちまける
の方が合います。

4. 「作品を直視した」

『語らいの本質』を直視したときには

「直視」は現実や真実に対して使われることが多く、

絵画では

- 目にした
- 初めて見た
- 対峙した
- 前に立った

などが文学的です。

例えば

『語らいの本質』の前に立ったとき

あるいは

『語らいの本質』と対峙したとき

5. 「脳が破裂するほど」

インパクトはありますが、

「脳が破裂するほどに、作品の前で驚愕したまま」

はやや大袈裟で、しかも比喩が続きます。

例えば

脳髄を揺さぶられるほどの衝撃を受け

あるいは

思考が停止するほどの衝撃を受け

の方が文章全体の格調には合っています。

6. 「驚愕したまま」

驚愕したまま全身の震えが治まらなかった

少し口語的です。

例えば

驚愕のあまり、全身の震えがしばらく治まらなかった。

の方が読みやすいでしょう。

7. 「持って生まれなければ」

持って生まれなければ、表現することはできない技量

「技量」は努力によって磨くものという意味が強いです。

ここでは

- 才能
- 感性
- 資質

の方が適切です。

例えば

生まれ持った才能なくしては到達し得ない表現であった。

8. 「一意専心」

意味は通じますが、

絵画制作では

- 一心不乱に
- 無我夢中で
- 全身全霊を傾けて

などの方が映像的になります。

9. 「人との接触を極度に嫌っている」

少し断定が強すぎます。

もし事実であれば問題ありませんが、

人物紹介としては

人との接触を極力避ける。

あるいは

人付き合いをほとんど好まない。

くらいの方が柔らかくなります。

10. 「本来は」

本来は自由奔放のお洒落な性格

「本来は」は

「実際は違うが」

という意味になります。

ここは

しかし、その素顔は自由奔放で洒脱な人物であり、

の方が自然です。

11. 「好感を抱いている」

友人について述べるには少し距離があります。

長年の友人なら

- 深い敬意を抱いている
- 心から信頼している
- 人として惹かれている

などの方が関係性が伝わります。

最も気になった箇所

文章として特に気になったのは次の三点です。

- 「客観的にキャンバスにぶちまける」(語感が衝突している)
 - 「技量」(ここは「才能」「感性」の方が適切)
 - 「目途が立たなければ」(制作にはあまり使わない表現)
-

全体としては、芸術論というよりも「人物論」として非常に力のある文章です。特に「作品の前で震えが止まらなかった」という体験は印象的で、筆者自身の感動が読者にも伝わります。一方で、比喻をやや整理し、語句を統一すると、文章全体に格調が生まれ、人物への敬意がより鮮明に伝わるでしょう。